

## 『日中友好岸関子賞』について

このたび日中友好会館に『日中友好岸関子賞』を創設することになった。これは、日本と中国の人々との友好を心から願いながら激動の時代を生き抜いた一人の女性の願いを形にしたものである。



岸関子は、日露戦争後に中国大陸に渡った実業家の娘に生まれ、奉天(現在の瀋陽)で育った。浪速女学校で学んでいたころから、学問好きの父が北京から招いた中国人の学者に、兄や弟とともに中国語、中国の古典、書道を学んだ。乗馬の好きなお転婆娘はやがて岸要五郎と結婚する。夫は「五族協和」の夢を追って、大学卒業後、大同学院第一期生として満州に渡り「満州国」の行政官となった青年であった。夫とともに満州の僻地を回るうちに、彼女も「五族協和」の実態に触れることになる。やがて「満州国」は崩壊し、夫は敗戦の混乱の中で悲劇の死を遂げた。幼い三人の娘を連れて日本に引き揚げて来た関子は、外務省アジア局の職員として働き、のちには日本と香港の合作映画の通訳・翻訳をしたりして三人の娘を育て上げた。

娘たちは母の教育によって正しい歴史認識を持つようになり、中国に親しんでいった。長女は中国文学研究者となり、早稲田大学で教鞭を執る。次女は実業家として中国とかかわり、三女はやはり中国文学研究者として桜美林大学で教鞭を執った。母としての彼女が娘たちに望んだのは、女性が自立することと、父の志を継いで、なんらかの形で中国との友好交流に寄与することであった。

娘たちに望んだだけでなく、みずからも留学生を自宅に預かったり、北京友誼賓館の料理人に日本料理を教え、さらには、日本の味を知ってもらうために自費で日本に招いたりした。なんといっても彼女の大きな貢献は、廖承志氏の要望に応じて「文革」直後、北京飯店の料理人たちに日本料理を基礎から教え、同ホテルの二階に正式に日本料理店を開店させたことである。

90歳を過ぎてからも娘たち一家とともにしばしば北京を訪れ、中国の人々から「姥姥」と呼ばれて慕われた。

2006年3月、桜の満開の季節に97歳の生涯を終えたが、このたび、彼女が残したささやかな預金を、中国東北部(旧満州)からの留学生に「姥姥のご褒美」として差し上げたいという遺族の願いに応じて、一人の女性の日中友好の志を伝えるために、日中友好会館に『日中友好岸関子賞』を創設したしだいである。